

もう一つの「小民史」

——国木田独歩と日清戦争（下）

丁 貴 連

四、日清戦争と異国体験、そして朝鮮

その一、従軍記者の見た朝鮮

前述の如く、日清戦争がはじまると、新聞各社は競って戦地に特派員を送り出した。その数、一二九名とされる。近代日本の初の対外戦争を取材するに当たって、メディアもしづきを削ったわけであるが、読者も日々刻々と変化する戦況を追い求めてこそって新聞を読んだ。しかしだからといって、戦場から送られるすべての記事が読者に歓迎されたわけではなく、日清戦争を通じてもっともよく読まれた従軍記は、国民新聞社から派遣された松原岩五郎の陸軍従軍記と国木田独歩の海軍従軍記である。ともに『国民新聞』に連載される当初から人気を博し、後に単行本となったが、この二つの従軍記の性格はまったく異なっている。

海軍に従軍した独歩は、黄海海戦後に軍艦千代田に乗り込み、大連湾進撃、旅順攻撃、威海衛夜撃作戦など日本海軍の活躍ぶりを目の当たりにしたものを弟の収二に宛てた書簡形式で書き上げて読者の注目を浴びた。一方、陸軍に従軍した松原岩五郎は、開戦前年に貧民窟ルポルタージュの記念碑的作品として知られる『最暗黒之東京』（一八九三）を刊行したばかりの著者らしく、肝心の戦況報告は簡単にして、紙面のほとんどを朝鮮の文化風俗を書くことに費やした⁽⁸⁾。つまり、前者は日本海軍の戦闘を扱い、後者は戦場となった朝鮮の文化風俗を描くことによつて読者の支持を得ていたわけである。ただし、松原の従軍記は独歩と違って、「天皇陛下万歳」や「大日本帝国万歳」のような日本軍の勇敢さをほめたたる華やかなところは一切にない。にもかかわらず、彼の従軍記が新聞に連載されるやいなや人気を博し、単行本になった

時には大ベストセラーになったのはほかでもない、隣国でありながら、その実態がまったく知らされていなかった朝鮮のことが多く取り上げられていたからである。

征韓論（一八七三）を契機に、日本では朝鮮を知ろうとする動きが起り、朝鮮地図や地誌、朝鮮案内書、朝鮮語学書などが次々と出版されるなど朝鮮への関心が高まっていた。⁽⁴⁹⁾しかし、それはあくまでも政治家や一部の知識人が示した関心であって、一般の人々にとって朝鮮は依然として未知の国なのであった。それが日清戦争によって実際の朝鮮の地を踏んだ特派員から生の情報が寄せられたのである。中でも松原岩五郎の記事は、朝鮮各地、とりわけ釜山から梁山、密陽、大邱、玄風、慶山、尚州に至るまでの南部「七府三県三十五部落」⁽⁵⁰⁾の地理・自然風土、歴史、交通から衣服と住家、生活の程度、一般風俗、性質までもが網羅的かつ体系的に紹介されていることもあって、読者から熱狂的に迎えられた。問題はその中身である。松原岩五郎の従軍記を含む戦地から伝えられる朝鮮関連記事は、程度の差こそあれ、そのほとんどは朝鮮の文化風俗をさげすみ、見下す内容となっている。その代表的なものをいくつか紹介すると、次のようなものがある。

八月二十八日早朝釜山を発して道を中路に取り東萊府に向ふ。雨なく風なき盛夏の炎天、数十日に亘つて稲田、蔬畦悉く旱魃を呈し路傍の石礫燬くが如く、黄塵脚を捲き身は蒸すが如し。発程一里にして海浜に部落あり小屋簇まつて二百余、是れ釜山津韓民の部落にして高所よりはを望めば恰も地上に藁蓋を伏せたるが如く團々として丘陵の間に起伏す近づきて是を見るに何れも陋陋卑濕の民舎にして高さ四尺に上らず、石を積みて垣となし、艸を覆ふて屋根とし泥土を以て僅かに壁を作り、丸木を以て自然の柱を築く、宛然たる乞丐小屋にしていまだ全く家の形を成さざるもの比々みな然り、而して其道路は丘陵に頼つて路傍に巖根峙ち、磊々たる塊石往来に横はる、而かも其部落は一個の小都会にして路傍に雑貨を鬻ぐ家あり、土店に草鞋を吊るし茶紙を置き、戸板の上に明太魚の干物、葉煙草塵を被れる寸燐の箱は眞田の紐と相駢んで零落たる光景、自ら国土の貧乏を示し、亡国の分限一目の下に了然たり。（松原岩五郎『征塵余録』⁽⁵¹⁾）

これは、『国民新聞』から派遣された松原岩五郎が初めて目にした朝鮮の都市景観について書いたものであるが、松原は狭くて糞尿だらけの不潔な道路と粗末でみじめな家屋、埃にまみれた薄汚い雑貨が並ぶみすばらしい店舗など、とうてい都市とは言えない釜山の様子を「亡国の分限一目の下に了然たり」と見下している。

韓人の家は釜山に在りて、日本居留地と一山を隔て、海に沿ふて行けば、阪路羊腸、水は溺糞に和して乱流す、躍りて之を躓れば黄泥滑らかにして脚を着るに処なく、転跌せんとするもの数々、路傍に韓人の家あり、家といはんよりは寧ろ小屋なり、小屋といふも猶ほ妥当ならざるを覚ふ、我国陋港の中在るところの掃溜に屋を加へたるが如しといふの適中せるを知るなり、(中略)余等は其の両三家を訪ひたり、主人妻孥、垢面蓬髪、穢を極め汚を尽して、近づくべからず、加ふるに彼等は日常汁にも香の物にも、皆な蒜を交へて食ふを以て、蒜臭、その呼吸に随ふて人を吹く、語らんと欲して、彼を塵き進むると両三步すれば、如何に豪雄なるものといへども宛

かも悪龍の毒気を吐に逢ひたるごとく、辟易すると教歩、手を揮つて退けざるはなし、余等も亦た其の臭に堪へず、直ちに走りて家を出づ(遅塚麗水『陣中日記』^②)

これは、『報知新聞』から派遣された遅塚麗水が朝鮮の家屋について書いたものであるが、前述の松原が朝鮮の家屋の粗末さと不潔さに嫌悪感をあらわにしたように、遅塚もまた、今にも崩れ落ちそうな豚小屋同然の粗末な家屋を見下し、「我国陋港の中在るところの掃溜に屋を加へたるが如しといふの適中せるを知るなり」と記している。

天性怠惰を以て有名なる朝鮮国人、世界中安逸を楽む亦韓人のごときは非ざるべし、彼等の平生たる其独り居る時は唯睡眠のみ、既に二人相寄れば冗談に時の遷るを知らず、三人集まつて必ず手遊を始む。(中略)兎も角朝鮮男子の遊惰なるは内地一般何処も異なりなくして長きは二尺五六寸、短きも一尺七八寸を下らざる長煙管を携へて日、一日ぶらり／＼と部落より部落へ、県より県へ、府より府へかけて同類相集まり寄つてたかつて博打

を開く、蓋し韓人一般の風俗は今日在つて明日なく、生活に在つても貯蓄の念なく、奮発して其身の地位境遇を進めんなどいふ観念は微塵なくして唯其日一日喰ふて通れば其日の役目は済むと云ふが如き極めて単純なる生涯にして将来の希望、前途の胸算などいふ事は棄にしたくもなき有なり様。(松原岩五郎『征塵余録』³³)

一方、これは朝鮮人の性質について取り上げたものであるが、松原は朝鮮の人たちが如何に勤勞を蔑視し、無為徒食で怠惰な生活を送っているかを、言葉を尽くして書き記している。同様のまなざしは清国人に対しても向けられていた。

行先遙かに山を見る漸く近づくに幾多の邱陵禿げ並びて姿のけはしからぬさすがに大國の風あり。砲台に昨日の戦を忍びつ、○○湾に碇を投ずれば乞食にも劣りたる支那のあやしき小船を漕ぎつけて船を仰ぎ物を乞ふ。飯の残り筵の切れ迄投げやる程の者は皆かい集めて嬉しげに笑ひたる亡國の恨は知らぬ様なり。船の形は画に見つる如く中部低く両端に高くして雅致多きものから不潔言

はん方なければ悪疫の恐れありとて近づけざるもあはれなり。(正岡子規『陣中日記』³⁴)

これは、『日本』新聞から派遣された正岡子規が初めて見た清国について述べたものであるが、子規は大連湾に着いた船の上から物乞いに集まつてきた清国人を「乞食にも劣りたる」と見下し、彼らを「ちゃん」とか「ちゃんく坊主」、あるいは「土人」といった蔑称で呼ぶのを憚らなかつた。

その二、兵士の見た朝鮮

たとえ戦地とはいえ、生まれて初めて見る外国の風土や建築、人々の生活風俗、文物などに記者たちもきつと胸をときめかせていたはずである。しかし、松原をはじめとする記者たちはそれらに対して素直な印象や感想を述べるよりも、現地の家屋や街の不潔さと異臭を強調して、それを野蠻の表象として蔑視しているのであった。これについて原田敬一氏の次の指摘は示唆に富む。

日清戦争の兵士は、一八七二年の学制発布後に生まれ

ている。彼らは学校と軍隊という二つの教育により、「衛生」や「清潔」について、念入りにたたき込まれるという経験を、理念的にも（「衛生的であることが近代人である」）、身体的にも（「まず手を洗い、食事をしよう」）経てきている第一世代である。兵士たちは、克服すべき対象の欠陥に最も敏感であり、「不潔」と「におい」の向こうに、必ず「遅れた文化」を見据えている。⁵⁵

氏によれば、日清戦争に従軍した兵士たちが現地人の「不潔」と「におい」に不快感をあらわにしたのは、学校と軍隊両方で徹底した公衆衛生教育を受けていたからであるという。

明治の初めに、日本ではコレラが大流行し、多くの犠牲者を生んだ。近代国家としての体制を整えつつあった明治政府は大きな打撃を受け、その予防に乗り出した。各県では衛生観念のない無知な民衆に対して、「まず手を洗い、食事をしよう」といったキャンペーンから天然痘など伝染病の予防接種、病原菌を運ぶ鼠の捕獲・買い上げの奨励、「衛生唱歌」の普及、「衛生博覧会」の全国開催など、その啓蒙に当たっ

た。⁵⁶ とりわけ、全国に二万校以上も設立された小学校をはじめとする各種学校は伝染病にさらされるもつとも危険な媒介所として認識され、学生への徹底的な衛生教育が行われた。その結果、日清戦争の始まる一八九〇年頃の日本には「衛生的であることが近代人である」という意識が社会一般に広く流布するようになっていたのである。

しかし、当時の朝鮮や清国は残念ながら近代的な衛生観念がいまだ普及されておらず、前述の従軍記者の書いた記事からも分かるように、兵士たちが目にした不潔な家屋や街の光景は日本で受けていた衛生教育をはるかに超えるものであった。次の文は朝鮮の元山と仁川に上陸した兵士が故郷の家族に送った手紙と日記の一部であるが、二人はまるで申し合わせたように、糞尿をそのまま道路に流す不潔な街に驚愕している。

聞きしに勝る不潔である。道路は塵糞にておわれ、不潔の大王をもつて自ら任ずる豚先生、子分を引き連れ、人間どもを横目で睨みつつ道路を横行する。臭気鼻をつき、嘔吐をもよおすなり。（第二十二連隊第五中隊歩兵

軍曹濱本利三郎が、一八九四年八月五日に朝鮮の元山津に上陸した際の印象を書いた従軍日記⁽²⁹⁾

朝鮮ノ家屋ハ我国ニ絶テ見サル荒屋ニシテ（中略）家ト家トノ間ヘ下水ヲ流シ或ハ尿ヤラ糞ヤラ流レテ（中略）道を歩クルモ臭気芬々殊ニ掃除ノトキハ道ノ間真中へ塵ヲ捨テル様見受ケラル故ニ市中ト雖も我カ国馬屋ヲ通ルヨリモマダ（第七聯隊第五中隊歩兵片岡力蔵二等軍曹が、一八九四年九月十三日に朝鮮の仁川に上陸した際の街の印象を書いた手紙⁽³⁰⁾）

朝鮮だけではない。清国も朝鮮以上に不潔極まりなかったと、第三師団騎兵隊第三大隊第二中隊第四小隊の西村松二郎は、郷里の石川県羽咋郡高浜町（現志賀町）に住んでいる友人岡部亮吉に次のような手紙を書き送っている。

是迄支那人ノたれながしノ糞尿も氷雪の中ニ隠レ居タルガ今ハ糞尿一時ニ表ハレ其不潔謂ふ不可尤モ支那人ハ自分門前にても上等社会ニ至ル迄糞尿こきながして別

に便所の設ケ無之兼而野蛮国とい知り居たれども余りの予想外ニテ驚人候⁽³¹⁾

このように見えてくると、兵士たちも従軍記者たちと同じく、戦争の巻き添えになった朝鮮や清国の人たちを思いやるよりも、彼らが如何に不潔極まりない生活を送っているか、そのことにしか関心を示していなかったことが分かる。

しかし、ここで留意したいのは、朝鮮人の不潔に嫌悪感をあらわにした兵士の多くは、実は東北など地方農村出身の農民であったということだ。次の文は、一八七八年に来日したイギリス人旅行家のイザベラ・バードが栃木県から福島県へ越えようとする山中で目撃したことを書いたものであるが、当時の関東北部の山間の人たちの生活がどんなにみじめなものであったかが如実に描かれている。

この人たちはリンネル製品を着ない。彼らはめつたに着物を洗濯することはなく、着物がどうやらもつまで、夜となく昼となく同じものをいつも来ている。（中略）彼らは汚い着物を着たままで、綿をつめた掛け布団にく

るまる。蒲団は日中には風通しの悪い押し入れの中にし
まっておく。これは年末から翌年の年末まで、洗濯され
ることはめつたにない。畳は外面がかなりきれいである
が、その中には虫がいつぱい巣くっており、塵や生物の
溜まり場となっている。髪には油や香油がむやみに塗り
こまれており、この地方では髪を整えるのは週に一回か、
あるいはそれより少ない場合が多い。このような生活の
結果として、どんな悲惨な状態に陥っているか、ここで
詳しく述べる必要はあるまい。その他は想像に任せた方
がよいであろう。この土地の住民、子どもたちには、蚤
やしらがたかっている。皮膚にただれや腫物ができる
のは、そのため痒みが出てきて搔くからである⁽⁶⁾。

ここに描かれた日本の農山村の生活と、兵士の描いた朝鮮
や清国の農村の生活との間に生活上における質的な差は感じ
られない。にもかかわらず、戦地に上陸した兵士たちがこ
ぞって現地人の不潔な生活を見下す内容の手紙を書いていた
のは、従軍前に受けていた衛生教育の影響が大きい。しかし、
それにもまして指摘したいのは、「聞きしに勝る不潔である」

と書いた前述の兵士の文からも分かるように、兵士たちはす
でに流布していた朝鮮及び朝鮮人像の影響を受けていたとい
うことである。

次の文は、第二十二連隊第五中隊歩兵軍曹濱本利三郎が朝
鮮人の気質について書いたものであるが、前述の松原岩五郎
が『国民新聞』に掲載した朝鮮人の気質を書いた記事と極め
て酷似している。

由来、韓人は怠惰性であるという。働いて財を貯え家
を富ますがごとき考えは毛頭ない。このような怠惰性に
国民をさせた一大原因は、この国の悪政のためである、
ということが予は徵発に身をもって知ったことだ。(中
略)

金銭があるため、むしろ一家団欒の生活を維持するこ
とができない。故に、一日働けば一日遊ぶという有様。
ために民衆には貧者もなく、富者もない⁽⁶⁾。

つまり、兵士たちは他人が使っていた文章を真似したり、
あるいは新聞や雑誌で読んだような決まり文句を使って手紙

を書いていたのである。その際に、彼らが見本としていたものがほかならぬ『国民新聞』や『日本』『報知新聞』など、当時日本の言論界をリードしていた新聞なのである。

その三、独歩の見た朝鮮

一般的に、日本人の朝鮮及び清国蔑視は日清戦争以後より始まったと言われる。しかし、これまで見てきたように、その蔑視観を煽つたのは本人たちの好むと好まざるとにかかわらず、松原岩五郎や遅塚麗水、正岡子規など、当時文壇に名をはせていた従軍文士たちである。独歩も例外ではなく、前述のとおり、清国人を「ちゃん」と呼び捨て、「くろをとが」見れば兎も角も、余の如き其の道に縁遠き者に在りては、只だ此の如き立派なる砲台を、一発の弾丸放つ事なく、敵に渡すとは、能く魂のなき支那兵かなと、敵ながら涙がこぼれそふに感じたるまでなり」と、清国兵への蔑視や侮蔑の気持ちを示す記事を盛んに書いていた。しかし、その独歩にも一つ別の顔が存在していたということは意外と知られていない。次の二つの文は、独歩が生まれて初めて朝鮮の地を踏んだ一八九四年十月二十二日のことを従軍記と日記にそれぞれ

書いたものである。

昨日(二十二日)午後四時大同江口を発したり。(中略) 主計長云へり、君、朝鮮の家を見物しては如何と、吾れ尤も願ふ処と答へたり。

此問答は二十一日の夜、士官室に於て、雑談の際に起りしもなる。此日主計長、大同江畔に上陸し、内地の三里を進みて食牛四五頭を買求したり。突然艦長は旗艦より帰りぬ。何時抜錨すべきやも知れざれば、出港用意にか、れと命ぜり。主計長は上陸して在らず、直ちに信号を以て旗艦を急ぐべきを命じぬ。僅かに牛を海岸まで伴ふたる主計長は、牛をそのまゝに托け置きて帰りたり。然るに吾艦其一夜は遂に抜錨せざる事となり、明朝牛を連れ来るため、再びボートをたすべきに定まりぬ。かくて吾、其のボートに乗じて、上陸すべき便宜を得たり。

此日麗らかなる天気は東京を出立以来なし。

されど愛弟、大同江畔の光景、朝鮮茅屋の実況、此の時の吾が感。凡てか、る事は吾今茲に詳記するのいとまなし。無事帰朝せば炬を擁して、親友数輩と共に快談

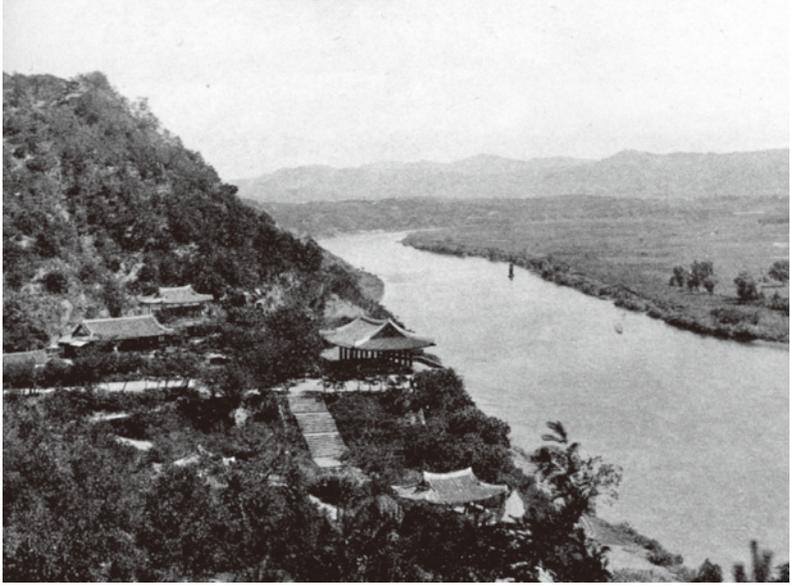


図 4. 大同江畔の風景 ⁽⁶⁴⁾

するの樂しきに如かじ。⁽⁶⁵⁾〔海軍従軍記〕一八九四年十月二十二日、傍線は筆者)

朝鮮人の住宅を見たるは是がはじめてなり。

朝鮮人の生活を実見したるも始めてなり。

小丘と孤林と、畦道と、海沢と、岩礁と退潮、満潮と夕陽と、白衣と、野牛とは更らに一段の光景を加ふに似たれども、寧ろ吾をして此の民の生活そのものを憐ましめたり。

彼等は現今己れの国の如何になりつ、あるかを知らざるが如し。人民、政事、戦争、相関する幾何ぞ。

大同江畔の此の光景は吾をして後年決して忘る、能はざる印象を与へたり。⁽⁶⁶⁾〔欺かざるの記〕一八九四年十月二十二日、傍線は筆者)



図5. 朝鮮の茅屋⁽⁶⁶⁾

注目すべきは、両方とも朝鮮人を侮ったり、朝鮮の住居の不潔を強調したりするような場面がまったくないということだ。朝鮮だけではない。清国人に対しても臆病で怯懦な兵士への蔑視はあっても、貧しい民間人の不潔な生活を蔑視するようなことは一切書いていない。

これまで見てきたように、日清戦争当時の日本のメディアは朝鮮や清国の住居の不潔と異臭を強調し、これを野蠻の象徴として蔑視する風潮が強かった。⁽⁶⁷⁾ その影響を受けた従軍記者や一般兵士、軍夫たちが差別や偏見、蔑視に満ちた記事や手紙、日記を盛んに書いていた。

しかし、独歩は公の報道記事だけではなく、私的な感情を吐露する日記や手紙ですらも朝鮮の人とその暮らしを蔑視するようなことは一切書いていない。それよりも、むしろ朝鮮や清国の人たちが自国の支配権をめぐる日本と清国が戦争をしていることについて何にも知らされていないことに深い関心を示し、その行く末を案じていた。つまり、独歩は日清戦争に従軍した他の多くの日本人のように安易な朝鮮蔑視に陥らなかったのである。この事実はずっと評価されてしかるべきだと思うが、それにしてもいったいなぜ独歩は誰もが驚

愕した朝鮮や清国の不潔な風俗には一切関心を示さなかった
のであろうか。

まず、海軍に従軍した独歩には陸軍に従軍した松原岩五郎
や正岡子規、遅塚麗水などと違って上陸の機会が少なく、朝
鮮や清国の人たちの生活を直に見ることができなかったであ
ろうことが指摘できる。だが、それは理由にはならない。な
ぜなら、日清戦争当時、従軍記者をはじめ多くの兵士、軍夫
たちは朝鮮の事物を注意深く観察することなく、日本で流布
していた情報などによって記事や手紙、日記などを書いてい
たからである。⁽⁸⁸⁾つまり、独歩もそうした情報を使ってい
くだけでも朝鮮を蔑視する記事を書くことができたはずである。に
もかかわらず、独歩は朝鮮とそこに住む人たちを侮蔑するよ
うな記事は一切書かなかった。

では、独歩はどうして皆が簡単に陥ったステレオタイプ
の隣国蔑視論に陥らなかったのであろうか。一つは彼が従軍前
に読んでいた貧民窟ルポルタージュの影響が考えられる。

五、日清戦争直前の日本の現実と貧民窟ルポルタージュ

日清戦争当時の日本は、資本主義の進展によって国民の生
活様式の上にもいろいろな変化が起こり、大都會を中心に西
洋式の生活様式が取り入れられるなど、国民生活の近代化が
推し進められていった。しかし、それはあくまでも都會中心
のものであって、交通・通信の不便な農山村地帯などでは依
然として江戸時代の伝統的な生活様式が営まれていた。⁽⁸⁹⁾つま
り、国民の大多数を占める農民たちは近代化とは無縁な生活
を送っていたのである。しかも、生活状態はよくなるどころ
か、明治政府の富国強兵政策に伴って増税が実施され、租税
公課が納入できない多くの農民たちは土地を手放したり、借
金に苦しむという事態に追い込まれた。困窮した農村や漁村
では、家族の窮状を救うために子どもたちが奉公や身売り、
出稼ぎなどに出かけたが、生活は酷くなる一方であった。当
時の農山村の人々が如何に貧しくみじめであったかは、前述
のイザベラ・バードの記録に詳しいが、問題は、このような
貧しく汚い生活が決して農山村だけのことではなかったこと
だ。

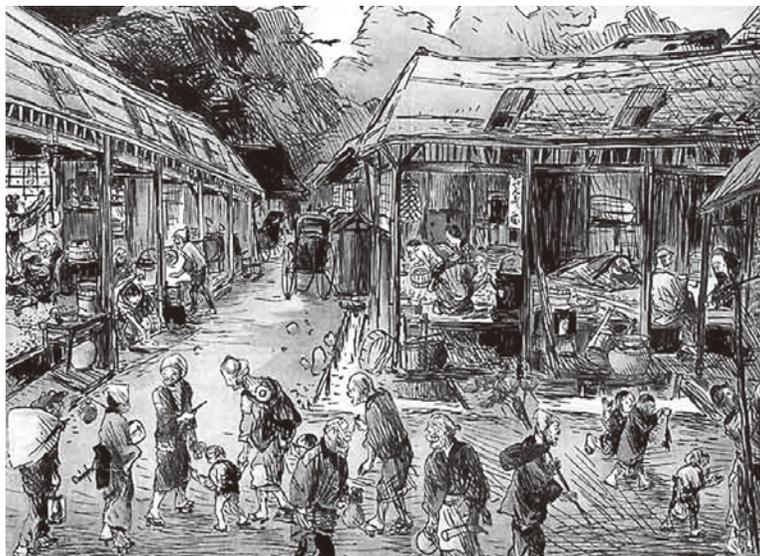


図6. 「鮫河橋貧家の夕」(明治三十六年十月)⁽⁷⁰⁾

図6のように、東京や大阪など大都会には残飯を奪い合っ
て常食とし、蚤や虱や皮膚病に苦しみ、汚水にまみれて暮ら
す人たちが集まって暮らす貧民窟があちこちに出現し、貧困
や衛生状態が深刻な社会問題となっていた。そうした問題に
対して救世軍などキリスト教団体による社会救済事業が活発
に展開されたが、文壇も黙って見てはいなかった。

独歩と同じく日清戦争に従軍した桜田文吾と松原岩五郎
が、当時東京の三大貧民窟であった下谷区万年町と四谷区鮫
河橋、芝区新網町、そして大阪の貧民街である名護町を实地
探検した『貧天地飢寒窟探検記』(一八九三)と『最暗黒の東京』
(一八九三)を次々と新聞に発表して世間を驚かせたのは前
述の通りである。その新聞記事を独歩が読んでいたのである。
それだけでも注目に値するが、独歩は松原たちの貧民窟ルポ
ルタージュを高く評価した(二十三階堂主人に与ふ)〔青年
文学〕一八九三年一月)を執筆し、貧民への強い関心を示
していたのである。次の文には貧民へ寄せる独歩の思いが単
なる好奇心だけではないことが如実に示されている。

嗚呼「貧」の一字、此の一字、意味深く且つ長し。人間

生まれて地に墜つ、何の為す処もなく、何の期する処もなく、終生営々、只だく貧と戦て其五十年の生命をやる、古往今往、幾万幾億？。人生渠等に取りて何等の意味ぞ。人間或は怠慢なり、然れども社会亦大不公平なるを免かれず。此の大不公平なる社会が、年々歳々、生み出す悲劇果たして幾何？ 薔薇の如き豊類も、『餓』の前には忽ち変じて茶色となる、失望となる狂乱となる、自暴自棄となる、罪悪となる、自殺となる、殺害となる。自由を与えよ、然らずんばパンを与えよ。仏国革命も詮て来れば自由の神と飢餓の悪魔との連合軍のみ。嗚呼『貧』決して言い易からず、橋畔の乞食は一大事実なり、陋巷窮屋は一大秘密なり。

二十三階堂主人足下、足下の筆少く莊重を欠く。貧は滑稽に非ず。世には軽薄狡猾の徒あり、野心の爲めに、人氣の爲めに、肆ま、に政綱を造りて、心にも無き、空言を並べ、自称して貧民の友と大呼す。足下望むらくは、吾が日本社会の爲めに、嚴莊深甚の筆を振て、渠等と与ふに根源を以てせよ。⁽²⁾

注目すべきは、独歩が貧民窟ルポを読みだした一八九〇、九一年頃の日本は立身出世思想が急激に色あせていく時期とはいえ、依然として上昇志向の強い社会であったことだ。それ故に人々の関心も銀座など華やかな世界にはかり向けられ、貧民や貧困は社会の片隅に追いやられていった。ところが、当時まだ無名の文学青年に過ぎなかつた独歩は、尾崎紅葉や幸田露伴など文壇を代表する作家たちが誰一人として顧みなかつた貧民⁽³⁾に注目し、貧民問題の「根源」的追求を呼び掛けるなど、貧民への理解を深めていったのである。まさにその時、独歩は日清戦争に従軍したわけである。

前述の如く、従軍当初の独歩は生まれてはじめて見る異国の風土と人々の生活に胸をときめかせた。しかし、その期待とは裏腹に朝鮮や清国の人たちは東京の貧民に勝るとも劣らない悲惨な生活を送っていた。そんな彼らを日清戦争に従軍した多くの日本人、中には故郷の生活と朝鮮の生活との間に質的な差があつたとは思えない東北の農村出身の兵士や都市の下層民出身の軍夫でさえも侮蔑の眼差しを向けていたのである。

独歩が、朝鮮や清国の貧しく不潔な風俗を強調する記事を

一切書かず、むしろ彼らの境遇を憐れみ、その行く末を案じずにはいられなかったのは貧民窟ルポルタージュを通して貧民の実態を誰よりも知っていたからである。しかも、従軍前にしばしば帰省していた山口県熊毛郡の知人たちの悲惨な現実を思うと、なおさらのことであつたらう。

六、新たな出稼ぎの場となつた日清戦争

その一、海外出稼ぎブームと山口県熊毛郡麻理府村

独歩は、日朝修好条約が締結された一八七六年から日清戦争に従軍する一八九四年までの約十八年間に、萩、岩国、山口、舟木、平生、柳井と県下の裁判所に勤務する父について山口県の各地を転々として過ごした。六歳から二十四歳(ただし、一八八七年四月からは親元を離れて東京、佐伯などで過ごしながら山口県には度々帰省していた)という人生の中で最も多感な時期を過ごした山口時代は独歩の文学世界に大きな影響を及ぼしていた。とりわけ、一八九一年五月から一八九四年八月まで機会のある度に帰省していた熊毛郡は、後に「熊毛もの」と言われる一連の作品群、すなわち「まぼろし」

(一八九八)「小春」「初恋」(一九〇〇)「帰去来」(一九〇二)「少年の悲哀」「富岡先生」「酒中日記」(一九〇二)「非凡なる凡人」「女難」「悪魔」(一九〇三)を生み出すほど、独歩の精神世界に計り知れない影響を及ぼしている。その熊毛時代を描いた作品の中でも、「帰去来」と「少年の悲哀」は独歩の外国、とりわけ朝鮮とのかかわりを知る上で注目し得る作品である。なぜなら、「帰去来」と「少年の悲哀」には一八九〇年代の山口県の実態、すなわち朝鮮貿易に従事するために住民の七割が朝鮮に移住した山口県熊毛郡麻理府村馬島のことや、貧しさゆえに娼婦となつて熊毛郡曾根村に流れてきた若い娘が朝鮮に売られていくことなどが取り上げられているからである。

明治になつて、多くの日本人が留学や公用、商用、私用、移民などを理由にハワイ、アメリカ本土やカナダをはじめ、メキシコ、ブラジルなどの中南米、朝鮮、満州、中国本土、ロシア極東、樺太、南洋群島、東南アジア、オセアニアといった海外に出ていった⁽¹⁾。こうした移住(渡航)ブームの背景には、明治維新による急激な社会の変化などで多くの地場産業が衰退し、再編を迫られた地域の人たちが新たな活動場所を

求めて海外進出に踏み切ったことが指摘できる。⁽⁵⁶⁾ 独歩の滞在していた山口県熊毛郡旧麻理府村（現在田布施町麻理府）はその典型的な地域である。

木村健二氏によれば、旧麻理府村は江戸時代に瀬戸内海航路の中継地として栄えたが、明治になって巨大海運業者及び大阪商船に集約される中小の汽船会社の進出などによって解体を余儀なくされた。そこで何らかの対応策を講じなければならなくなった麻理府村は、幕末より往來の経験のある朝鮮航路に目を付け、麻理府村馬島の有力な船主たちや同村別府の庄屋たちが西洋形の帆船を仕立てて大阪からマツチなどの雑貨や綿布、酒、材木、塩などを仕入れて朝鮮へ行き、米や大豆などの穀物を大阪へ運ぶという朝鮮貿易に乗り出した。⁽⁵⁶⁾ それゆえ、この地方では昔から「朝鮮成金」といわれる資産家が多く、帰省中の独歩が英語を教えるために出入りしていた石崎家も、綿布を主とした朝鮮貿易を手広くやっていた麻理府村周辺では飛びぬけた資産家の一人であった。⁽⁵⁷⁾

しかし、西洋形の帆船を用いた朝鮮貿易も、一八九〇年代後期より汽船会社の朝鮮航路への進出が活発化するにつれて後退を余儀なくされた。その結果、麻理府村馬島は、独歩が

「帰去来」の中で、

麻理府村の者は沢山釜山に移住して居る。朝鮮貿易をする者は小川の外、麻理府村には猶ほ四五軒あつて、皆な五十噸、七十噸、乃至九十噸までの合子船を四五艘も持て居るのである。「朝鮮」の語は麻理府で少しも外国らしく響かない、東京大阪といふよりも今少しく近しく思はれて居るのである。且つ同村の中に編入して有る馬島、麻理府村の岸から数丁を隔てる一小島で住民の七分は已に釜山仁川等に居住して、今は空家に留守居のみ住で居る次第である。⁽⁵⁸⁾

と記しているように、「男はほとんど朝鮮貿易のためや、遠洋へ出魚のために不在で、女のみのきわめてさびしい島」となってしまった。つまり、現実の麻里布村は近代化に取り残された貧しい漁村だったのである。

しかし、一八八七年に山口県を出てからほぼ四年ぶりに帰省した一八九一年頃の独歩にとって麻理府村は、「余別府を見るは之れが始めてなり別府は帆前船まがへ等を造る船大工

あり、亦た（以下三字抹消、小買的）物品を店前に並べて売
る家は殆んどなく。又た構大なる家宅多し別府は朝鮮商の大
なる家多ければなり⁽⁸⁰⁾（『明治廿四年日記』七月十一日）と、
朝鮮貿易で潤っているという印象が強かった。それゆえに村
の若者から商売の修業のために朝鮮に渡ると言われても、

此日、横道乙熊サン（漸く十四五歳）商業見習の爲め、
明後日より朝鮮に航すとて、いとま乞いに來らる、朝鮮
と聞けば、其の道のりはもとより東京に行くより余程
近きも、何となく妙な感あり。⁽⁸¹⁾（『明治廿四年日記』六月
二六日）

と、地理的な関心しか示さず、なぜ彼らが住み慣れた故郷を
離れ、外国で商売の修業を受けねばならないのか、その背景
について知ろうとしなかった。

その二、戦場へ向かう底辺の人たち
ところが、十年後の独歩は違っていた。一九〇一年と
一九〇二年に相次ぎ発表された「帰去來」と「少年の悲哀」

には、村の若者が朝鮮にとどまらず、ハワイやアメリカまで
出稼ぎに行っていることと、その移住者たちの後を追って海
外に渡って行く「からゆきさん」のことが取り上げられてい
るのである。これは、海外渡航者に対する独歩の認識が深まっ
たことを意味するが、その認識を深めさせたのがほかならぬ、
日清戦争なのである。

一八九四年十月に軍艦千代田に乗り込んだ独歩は、翌年三
月までの約五カ月を艦上で過ごした。その間独歩は、大連湾
を拠点として戦争作戦を遂行していた艦上から戦況を伝える
記事を国民新聞社に書き送る一方、食糧を調達する軍人らに
随行して朝鮮の大同江畔や清国の花園口、バカ島、和尚島、
ヴィクトリア嶼などに上陸し、名も知らないさまざまな外国
人に会っていたことは前述したとおりである。しかし、独歩
は外国人にばかり会っていたわけではない。独歩が記した従
軍記には、外国人との交流や戦闘場面のほか「艦上の天長
節」「艦上における郵便物」「艦中の閑日月」「大連湾雑言」
などの記事に見られるような、軍隊（軍艦）生活の様子が生々
しく紹介されているばかりでなく、運送船の入夫、軍夫、新
聞記者など民間人が描かれている。ただ民間人に関する記事

が少ないが故に、これまでの独歩の従軍記は軍隊生活の様子が少なかった。や、外国人との交流のみが注目されていたのも事実である。

ところが、独歩には日清戦争を契機に海外に出るようになった民間人を取り上げた作品が少なくない。例えば、日清戦争に刺激されて軍夫となって大陸に渡ったものの、彼の地で病死してしまった若者を描いた「置土産」（一九〇〇）、日清戦争の勝利によって獲得された植民地へ派遣される兵士とその家族が登場する「関山越」（一九〇〇）、従軍記者として日清戦争に参戦した主人公が久しぶりに帰省した故郷で目撃した出稼ぎブームに浮かれる村の若者たちの登場する「帰去来」（一九〇一）、日清戦争の勝利によって日本の影響力が強くなった朝鮮に流れていく娼婦を描いた「少年の悲哀」（一九〇二）、海軍士官となった主人公が少年時代に別れ、後に船員となった友人と大連湾上の運送船で再会するという「馬上の友」（一九〇三）などである。六〇編の作品のうち、五編も日清戦争を契機に海外に出かけていく底辺の人たちを取り上げているということは、それだけ彼らの存在が気になっていったと思われるが、独歩が海外出稼ぎの人たちに深い関心を示すようになったのはほかでもない。帰省先の山口県

熊毛郡で出稼ぎに行く人たちの困窮を目の当たりにしたからである。

独歩が再び山口県熊毛郡に足を踏み入れたのは、大分県佐伯の鶴谷学館に教師として赴任する際に寄った一八九三年九月末である。以後、日清戦争に従軍する一八九四年十月まで計三回（一八九三年十二月末、一八九四年三月、同年八月）帰省しているが、当時の熊毛郡は他の農村地帯と同じく、近代化のあおりを受けて経済が大きな打撃を受け、多くの農民が土地を手放したり、借金に苦しむという事態に追い込まれていたのは前述のとおりである。その結果、村人の中には生活費欲しさに犯罪に手を出したり、一家が零落して北海道に移住したり、家族の窮状を救うために東京や大阪のような大都会は無論ハワイやアメリカ、南米など海外にまで出稼ぎに行ったり、仕事がなくて村を流浪したりする人たちが続出した。朝鮮貿易で潤っていたかつての村の姿はすっかり影を潜め、遊ぶ金ほしさに犯罪にまで手を出すようになってしまった村人の悲惨な暮らしを目撃した独歩の衝撃は大きく、帰省中は毎日のように「多く見たり、多く聞きたり、思へば此等の事実悉く深き意味ある哉」（一八九三年十二月三十一日）、

「横道氏の零落と悲惨の跡を見る、其事は横道氏の事を記する時記す可し」（同月二日）、「帰省中に聞き得たる事実、観察したる事實は吾をして実に言ふ可からざる悲を心底に感ぜしめぬ」（同月四日）と、村人の行く末を案じずにはいられなかった。

それほど当時の熊本郡は経済的に困窮を極めていたが、そこに日清戦争が勃発し、戦場となった朝鮮と清国が新たな出稼ぎ場として注目を集めたのである。それまで都会のスラム街に住みついたり、ハワイやアメリカ、南米などへ出稼ぎに行っていた底辺の人たちは一斉に戦場へと向かった。熊本郡も例外ではなく、生活に困った農夫たちが「軍夫となりて彼地に渡り一稼大きく儲けて帰り」（「置土産」）たいと、軍夫に募集して戦場に渡ったのは独歩の作品でも指摘されている。軍夫だけではない。地理的に近い朝鮮には軍を相手に一儲けしようとした人たちの渡航が急増し、京城（現ソウル）をはじめ釜山、元山、仁川、平壤など朝鮮各地には日本から押し寄せた雑貨商、貿易商、飲食店、料理屋、薬売たちがあふれ、中には醜業を営む人たちもいたと、高崎宗司氏はその著『植民地期朝鮮の日本人』（岩波新書、二〇〇二）の中で

次のように述べている。

戦争が始まると、軍は民間所有の船を借り上げて兵馬の運送に当たらせた。船舶所有者の利益は多かった。朝鮮に上陸した日本の軍人・軍夫を相手に商売しようとした人たちも大勢いた。小舟を操って大阪から仁川に赴いた森田熊夫もそうした一人であった（森田熊夫、一五二）。（中略）

仁川には、上陸した日本軍を相手に商売しようとした人たちが次々と入港してきた。仁川の居留民は、九四年四月に二五六四人であったが、一年後の九五年四月には四三七九人へと激増した。（中略）

元山でも、同時期、七九五年から九〇三人に増えている。戦場から離れていた釜山の居留民は、同時期、四七五〇人から四〇二八人に減少している。冒険的な人々が戦場を求めて漢城や仁川に向かったためである。（中略）

ところで、戦場の北上に伴って、軍を相手に一儲けしようとした人たちは、軍とともに開港地を出て、北朝鮮

の平壤・開城・鎮南浦・義州などに進出し、定住した。九四年九月、日本軍が平壤に入城すると、わずか一ヶ月の間に四〇〇〜五〇〇人の日本人が平壤に押し掛けた（平壤商業会議所、三九五）。これまで、漢城・仁川にいて、「口銭取ヲ業トセシ者、又ハ雜貨商ノ失敗者、否ラザレバ一定ノ營業ナカリシ者、又ハ全ク商売ノ經驗ナキ者等」すなわち「冒險射利ノ輩等」が、「必死競争シテ此地ニ來リ皆韓人ノ空家ニ占入シ各自随意ニ店舗ヲ設ケ、軍人軍屬ニ対シ酒煙草砂糖又ハ防寒具ヲ売付ケタ」のである。中には「醜業」を営む者もあった」（『通商彙纂』第三八号、九六年、六、一〇）

九五年四月には下関で講和条約が締結されて、日清戦争は終わった。そのころから、平壤の東・大同門の通りには、貿易商尹藤佐七らが住み着くようになった。（全平壤楽浪会、五五）。同年七月下旬、平壤の居留民数は一二人になった。男九四人、女一八人であった。出身地別に見れば、長崎四二、山口二六、福岡・広島各七人であった。職業別に見れば、雜貨商一〇、貿易商九、飲食店六、売葉四であった。

しかし、豊かな生活を夢見て戦場に渡った出稼ぎの人たちは表1からも分かるように、大部分は商業に従事し、しかも小売雜貨（ほとんど行商）や商店の店員、番頭、女中奉公、手代、丁稚、娼婦、日雇い、塩田労働者といった下積みの仕事についていた。つまり、朝鮮に渡った出稼ぎの人たちは日本と変わらない底辺生活を余儀なくされていたのである。にもかかわらず、出稼ぎの数は減るところか、むしろ増えて戦後の一八九六年には朝鮮在住の日本人は一人を越え、十年後の一九〇六年には七万人に達している。しかも彼らの大半は、表2「本籍地別朝鮮在留日本」からも分かるように、山口県や長崎県、福岡県、大分県、熊本県、広島県など、いわゆる西日本からの出身者である。これは当時の西日本が経済的に貧しかったことを物語っているが、その西日本の中でも山口県は長崎県とトップを争うほど朝鮮へ渡る者が多かった。とりわけ熊毛郡旧麻理府村は住民の七割が朝鮮に移住するなど、朝鮮進出が盛んだったのは前述のとおりである。

表1 「朝鮮居留地在留日本人本業者別人数」(単位:人)⁽⁸³⁾

職 種	1897年 (%)	1906年 (%)	1910年 (%)
官吏	266 (7.2)	2,107 (6.7)	4,169 (8.7)
公使	— —	136 (0.4)	995 (2.3)
教員	14 (0.4)	181 (0.6)	345 (0.8)
新聞及雑誌記	— —	— —	165 (0.4)
神官	— —	5 (0.0)	25 (0.1)
僧侶及宣教師	8 (0.2)	72 (0.2)	121 (0.3)
弁護士及訴訟代理人	— —	32 (0.1)	60 (0.1)
医師	11 (0.3)	200 (0.6)	216 (0.5)
産婆	7 (0.2)	62 (0.2)	121 (0.3)
農業	23 (0.6)	1,063 (3.4)	1,180 (2.7)
商業	1,660 (45.1)	9,350 (29.8)	10,884 (25.3)
工業	752 (20.4)	3,858 (12.3)	5,064 (11.8)
漁業	127 (3.4)	793 (2.5)	1,153 (2.7)
雑業	547 (14.8)	6,435 (20.5)	9,978 (23.2)
芸娼妓酌婦	260 (7.1)	2,500 (8.0)	2,517 (5.8)
勞力	9 (0.2)	3,618 (11.5)	4,705 (10.9)
無職業		935 (3.0)	1,397 (3.2)
計	3,684 (100)	31,347 (100)	43,095 (100)

出典: 木村健一「在外居留民の社会活動」(『岩波講座 近代日本と植民地5 - 膨張する帝国の人流 -』岩波書店、1993) 34頁。

表2 「本籍地別朝鮮在留日本人」⁽⁸⁴⁾

1896年			1906年		
府 県	人数	比率	府 県	人数	比率
	人	%		人	%
長崎	3,587	30.3	山口	13,251	17.0
山口	3,294	27.8	長崎	8,542	11.0
大分	970	8.2	福岡	5,842	7.5
福岡	646	5.4	大分	5,436	7.0
熊本	460	3.9	広島	4,176	5.4
大阪	427	3.6	熊本	4,164	5.3
広島	310	2.6	大阪	3,772	4.8
佐賀	257	2.2	佐賀	2,540	3.3
兵庫	233	2.0	兵庫	2,252	2.9
東京	229	1.9	東京	2,121	2.7
その他36道府県	1,441	12.2	その他37道府県	25,816	33.1
計	11,854	100.1	計	77,912	100.0

出典: 木村健一『在朝日本人の社会史』(未来社、1999) 14頁。

その熊本郡に従軍直前の一八九四年八月から一カ月ほど滞在していた独歩は、佐伯から帰省途中に「出兵の光景を目撃せり。三日の午前十一時三ヶ濱を出発して午前四時広島に着し直ちに乗り換えて九時帰国す。戦場の報しきりに至る」と、戦場に向かう兵士を目撃していたが、その出兵光景の中に兵士の後を追って戦場へと出稼ぎに行く「置土産」の吉次や「少年の悲哀」の娼婦、「馬上の友」の船員のような若者が交じっていたのは想像に難しくない。

その三、忘れられた出稼ぎの人たち

しかし、出稼ぎの現実には決して甘くなかった。「置土産」の吉次が「軍夫となりて彼地に渡り一稼ぎ大きく儲けて帰り、同じ油を売るならば資本を下して一構えの店を出した」と人生設計をしていたものの、その夢も果たさず「彼方で病死した」ように、出稼ぎの人たちは病气や寒さ、負傷、怪我などによって志半ばで行き倒れたり、あるいは「少年の悲哀」の娼婦のように、

流の女は朝鮮に流れ渡つて、更に何処の涯に漂泊して其

果敢ない生涯を送つて居るやら、それとも既に此世を辞して寧ろ静寂なる死の国に赴いたことやら、僕は無論知らないし徳二郎も知らんらしい。

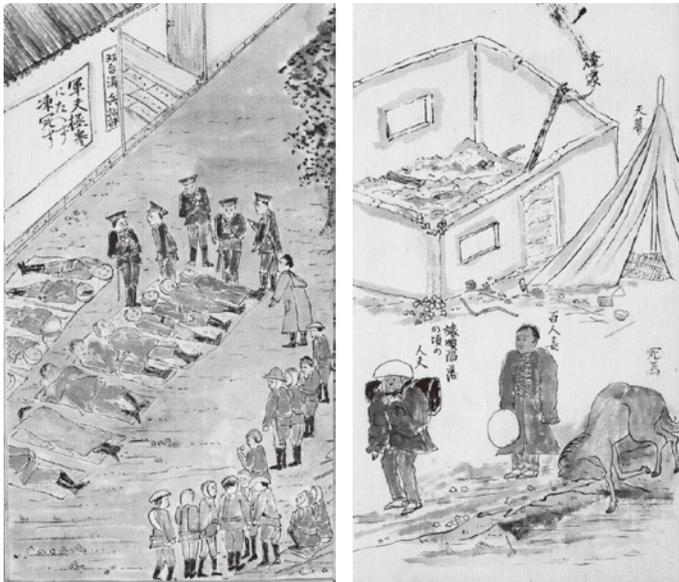
と、誰にも気づかれないまま消えさつた人も少なくなかった。ところが、近代国家建設を急ぐ当時の日本社会は出稼ぎの置かれた過酷な現実を顧みる余裕などなく、彼らは無関心の中で忘れられていったのである。問題は一般の人だけではなく、日清戦争に従軍した軍夫たちも悉く忘れられてしまったことである。

一ノ瀬俊哉『旅順と南京―日中五十年戦争の起源』（文春新書、二〇〇七）によれば、日清戦争当時、軍は当初、後方輸送は輜重兵・輜重輸卒の担当する駄馬の使用、朝鮮人の人夫・馬の雇用で補えると安易に考えていたが、朝鮮半島の道路事情は馬匹の使用に適さず、また朝鮮人の逃亡などが相次いだため日本から人夫（＝軍夫）を募集することになった。熊本第六師団のように、駄馬より人間を雇う方が安上がりという意見を上申した師団もあった。結局、一八九四年八月下旬以降、各師団は大量の「人夫」雇用を開始し、

一五万三九七四人の軍夫が雇われ、そのうち十数万人が戦場に送り込まれた。⁽⁸⁸⁾

この軍夫の雇用と管理は軍が直接行えず、軍出入りの請負業者が担当したが、彼らには国内では四十銭、国外勤務の場合には五十銭の日給が支給され、一年間で五〇円から一四〇円を故郷に送金したり、貯金することができた。それゆえ都市や農村の貧民が競って応募し、一八九四年十二月初旬の東京では、不況に困っていた人力車夫が「軍夫募集に際し、我れ先きと争うてこの募集に応じ」、東京市内だけで軍夫になった人力車夫は四万人を超えた。⁽⁸⁹⁾

しかし、図6の如く、兵士と違って軍服も靴も与えられず股引に法被、草鞋という出立ちで酷寒の戦場に送られた軍夫たちは寒さと病氣、戦闘に巻き込まれるなどして生きて帰ることが出来ない人が続出した。中には「茂早や寒さも烈しく、身なりは単えの半天、同も股引。あまりさむさむさの強きゆえ、悪いと知りつつチャン公のきもの徴発してこれきてさむさを凌ぐ、思い思いにきたふうぞく余程妙てこなふう成り」(第一師団軍夫丸木蔵『明治二拾七八年戦没日記』の一八九四年十一月二十七日日記)と、清国人の着物を略奪して寒さを凌



ぐ軍夫たちもいたりしたが、それでも七千人以上、おそらくは八千人以上の軍夫が凍死・戦病死したと推定されている。⁽⁹⁰⁾

図6. 極寒にたえず凍死した軍夫と中国人の着物を略奪して寒さを凌ぐ人夫・百人長⁽⁹²⁾(前者1894年11月22日日記、後者1894年11月27日日記)

日清戦争の際に戦死した日本側の死亡者は二万数千人とされるが、そのうち三分の一が正規の軍人軍属以外の軍夫だということになる。しかも、彼らは軍人と違って、戦死者として扱われず、政府の『官報』に掲載されることがなかった。⁸³つまり、軍夫は軍に無視され、使い捨てにされてしまったのである。政府だけではない。一般市民も戦場に出稼ぎに行った底辺の人たちを忘れていたことが、独歩の『置土産』には次のように記されている。

若い者の遽に消へて無くなる、此頃は其幾人と いふを知らず大抵は軍夫と定まり居れば、吉次も 其一人ぞと怪しむ者なく三角餅の茶店の噂も七十五日経過せぬ間
に吉次の名さへ消えてなくなりぬ。⁸⁴

大谷正氏は『日清戦争の社会史 - 「文明戦争」と民衆』（フォーラム、一九九四）の中で、『『文明戦争』の美名の下で隠され、忘れ去られていった軍人以外の戦争参加者でもあり被害者でもあった軍夫の実態を明らかに』し、「従来の研究ではほとんど明らかにされていなかった、日本の民衆が体験

した『もうひとつの日清戦争』に光を当ててみ』たいと述べている。

しかし、独歩はすでに一〇〇年前にその問題に気づき、日清戦争の勝利の背後に明治の社会から忘れられてしまった出稼ぎの存在を浮かび上がらせたのである。これはいくら強調してもし過ぎることはないと思われるが、このような見方ができたのはほかでもない、従軍記者として危険な戦場に出かけ、そこで補給・輸送を担う軍夫をはじめ様々な民間人たちが戦争という極限状態の中でも黙々と働く様子を目撃していたからである。しかも、彼らの多くは独歩が育った山口県の出身者であった。従軍前から村の若者が朝鮮にとどまらずハワイやアメリカ、南米などに出稼ぎに行くことを目撃し、その実態をよく知っていた独歩は、新たな出稼ぎの場となった戦場に出て行く村人の安否を気づかずにはいられなかった。なぜなら、図6のように、軍夫をはじめ出稼ぎの人たちは劣悪な環境で働かされていたからである。

ところが、独歩を驚かせたのはそれだけではなかった。戦場で会う異国の人たちは日本人の出稼ぎ以上に悲惨極まりない生活を送っていたのである。糞尿を道路に垂れ流す貧しく

不潔な生活はともかく、朝鮮や清国の人たちは自分の国が戦争をしていることさえ知らされていない、いわゆる社会の片隅に忘れられた人々なのであった。国を挙げて戦争をしている日本から取材に来ていた独歩の衝撃は大きく、何度もその事実を従軍記や日記に書き記していることは前述のとおりである。しかし、文明の戦争を行っていた日本はこの憐れな異国の民の貴重な食料を略奪するばかりでなく、出稼ぎのためにはるばる日本から戦場に来ていた底辺の人たちを顧みず、その存在を意図的に隠し、無視したのである。

独歩が従軍中に会った外国人の中でもとりわけ、自分の国が戦争をしていることさえ知らされていない朝鮮と清国の人たちに深い関心を示し、彼らのことを「後年決して忘る、能はざる印象を与へ」られたと述べていたのは、彼らの中に従軍前に読んでいた東京のスラム街の貧民や熊毛郡で見かけた村人の悲惨な現実を重ね合わせていたからにはかならない。そのまなざしが見つめた朝鮮と清国の人々の暮らしと風俗に侮蔑や蔑視、差別の思いがないのは当然のことである。

七、結びに代えてーもう一つの「小民史」

日清戦争から帰還した独歩は、佐々城本支・豊寿夫妻が主催した従軍記者のための晩餐会の席で知り合った夫妻の長女、信子と熱愛の末に結婚したものの、半年足らずで破局を迎え、文学者の道を歩み始めた。処女作「源叔父」は、日清戦争勃発からちょうど三年後の一八九七年八月に発表されたが、独歩は初めての小説でそれまでの日本文学がまったく顧みなかった孤独な渡し守の老人と、白痴に等しい捨て子の乞食の少年との交流を描き、文壇の注目を浴びた。

一八九七年当時の日本では、日清戦争を契機に都市化・産業化が急速に進み、農村の小作人が流民化して都市の貧民窟に流れ込むなど、貧困が新たな社会問題として浮上してきていた。一方では、封建的な家族制度や遊里の風習の矛盾等による人権の無視や、富裕者の横暴も表面化していた。⁽⁸⁾ そうした社会的、経済的な歪みや矛盾の露呈に作家たちも黙ってはいなかったが、小説の中の主人公は依然として書生や学士、官僚、実業家といった立身出世を志したエリートが大勢を占めていた。そこに、寂れた宿場の老主人をはじめ電話交換手、漁夫、軍夫、娼婦、小学校教師、盲目の尺八吹き、浮浪人、

土方、貧しい植木職人といった社会の片隅でひっそりと暮らす様々な無名の民衆を取り上げた独歩の作品が登場してきたのである。いわゆる「小民」の登場である。

山田博光氏は、独歩が当時、文壇の大勢を占めていた立身出世を願う才子佳人を描く代わりに、無名の民衆を描くようになったのは、キリスト教やカーライル、ワーズワース、吉田松陰の「愛民」思想のほかに民友社の平民主義などから受けた影響が強いと指摘している⁹⁷。確かにその通りである。

しかし、これまで見てきたように、小民を描いた独歩の作品の中には日清戦争に材をとったものが少なくない。前述の「関山越」「遺言」「置土産」「婦去来」「馬上の友」「酒中日記」「少年の悲哀」のほかに、日清戦争中に大連湾頭で見かけた名も知らない清国の青年漁夫が忘れられないという「忘れえぬ人々」(一八九七)を加えると、日清戦争関連ものが占める割合は非常に高い。それだけ日清戦争から受けた影響が大きかったということだが、独歩自身も、

小生をして追懐録を草せめば三部の別種にして而も詩趣に富めること相譲らざる制作出来上がるべし。

第一、は『若き田舎教師』という題目にて豊後の一旧城下における一年間の僕の遇逢観察を書かせしめよ。第二、は『従軍記者』という題の下に余が乗艦観察の五カ月余の見聞を書かしめよ。第三、は『わかき血』とか何とか題して恋愛の始終を書かしめよ。此三つの者は悉く連続せり。⁹⁸

と、従軍体験は「追懐録」にしたい体験のうちのひとつだと述べている。その結果、独歩は全六十編の作品のうち八編も日清戦争関連作品を書き残したわけであるが、ただし、直接戦場を描いたものは「遺言」と「馬上の友」の二編のみで、後は戦争がもたらした間接的影響、すなわち戦争とは無縁に社会の片隅でひっそりと暮らしていた底辺の人たちが戦争によって新たな出稼ぎ場として注目されるようになった朝鮮や台湾などへ出かけていく様子を描いたものばかりである。これは注目すべき事実である。

というのも、日清戦争に取材した作品は少なくない。泉鏡花「予備兵」「海戦の余波」、大塚楠緒「応募兵」、江見水蔭「夏服士官」「雪戦」「病死兵」(いずれも一八九四)、泉鏡花「琵琶

琵琶伝」、松居松葉「脱營兵」、饗庭篁村「従軍人夫」、小杉天外「喇叭卒」、三宅青軒「水電士官」「朝鮮の雲」、江見水蔭「水電艇」「電光石火」、金子春夢「凱旋二人軍夫」、村井弦齋「旭日桜」（いずれも一八九五）、泉鏡花「海城発電」「勝手口」、山田美妙「負傷兵」、川上眉山「大村少尉」（いずれも一八九六）、泉鏡花「凱旋祭り」（一八九七）、広津柳浪「七騎落」、国木田独歩「遺言」「置土産」（いずれも一九〇〇）など、戦中から戦後にかけて沢山の作品が描かれている。しかし、泉鏡花の「琵琶伝」「海城発電」と国木田独歩の「置土産」など一部の作品を除く、ほとんどの作品は尽忠報国の亀鑑とも言うべき軍人と軍夫を題材にしたものであって、戦争を奇貨として一旗上げようと危険な戦地に渡った底辺の人たちを取り上げたものはないからである。

参謀本部編『明治廿七八年日清戦史』（一九〇四）一九〇七）によれば、日清戦争に動員された全兵力は二十四万〇六一六名で、そのうち軍夫が十五万四〇〇〇名である。⁽¹⁰⁾ この軍人と軍夫を相手に商売しようとした人たちが日本全国から戦地に出かけていた。とりわけ戦場となった朝鮮と台湾には戦前と戦後合わせて二万人以上が進出している⁽¹¹⁾

が、当時の日本の文壇では誰一人として戦場へ出稼ぎに行っただ人たちに注目し、その実態を小説の形で残さなかった。

ところが、独歩は違っていた。作家となるや否や真つ先に、終戦とともに忘れ去られていった軍夫と、軍を相手に一儲けしようと戦場や植民地に出かけていく娼婦や商人たちの実態を取り上げ、彼らの存在を忘れなかった。いや忘れるわけにはいかなかったのである。なぜなら、彼らこそ文学者を志したその日に、

多くの歴史は虚栄の歴史成り、パニティーの記録成り。

人類真の歴史は山林海辺の小民に問へ、哲学史と文学史と政権史と文明史の外に少民史を加へよ、人類の歴史始めて全からん。⁽¹²⁾

と、書くべき対象と自覚していた「小民」にはかならなかつたからである。

本論文では、日清戦争を機として朝鮮や中国、台湾など海外に出稼ぎにいった軍夫やからゆきさん、商人といった底辺の人たちの存在に注目することによって、独歩の小民観形成

に日清戦争とその従軍体験が深い影響を及ぼしていたという
事実を浮き彫りにすることができた。

注

- (48) 松原岩五郎の陸軍従軍記『征塵余録』(春陽堂、一八九六)は、前半部と後半部に分かれ、前半は朝鮮の探検記、後半は従軍記という構成となっている。
- (49) 朴春日『増補 近代日本文学における朝鮮像』(未来社、一九八五)三三二頁。
- (50) 松原岩五郎、前掲書(註48)二二六頁。
- (51) 松原岩五郎、前掲書(註48)十から十一頁。
- (52) 遅塚麗水、前掲書(註7)十四～十五頁。
- (53) 松原岩五郎、前掲書(註48)四十三～四十五頁。
- (54) 正岡子規『正岡子規全集第八卷』(講談社、一九七五)七八～一五四頁。
- (55) 原田敬一、前掲書(註8)一六一頁。
- (56) 小野芳郎『清潔』の近代―「衛生唱歌」から「公金グツズ」へ』(講談社、一九九七)参照。
- (57) 濱本利三郎著・地主愛子編『日清戦争従軍秘録―80年目に公開する、その因果関係』(青春出版社、一九七二)三十二～三十三頁。
- (58) 檜山幸夫『日清戦争―秘蔵写真が明かす真実』(講談社、一九九七)一〇八頁。
- (59) 檜山幸夫、前掲書(註58)一〇九頁。
- (60) イザベラ・バード著・高梨健吉訳『日本奥地紀行』(平凡社、一九七三)一〇九頁。
- (61) 濱本利三郎、前掲書(註57)三十九頁。
- (62) 国木田独歩、前掲書(註15)五十六頁。
- (63) 国木田独歩、前掲書(註15)二十一頁。
- (64) 『写真で見る近代韓国(下)山河と風物』(端文堂、一九八六年)四一頁。
- (65) 国木田独歩、前掲書(註26)二四一頁。
- (66) 『写真で見る近代韓国(続)生活と風俗』(端文堂、一九八七)八七頁。
- (67) 大谷正『兵士と軍夫の日清戦争』(有志舎、二〇〇六)九四頁。
- (68) 大谷正、前掲書(註67)二二三頁。

- (69) 五味文彦編『詳説日本史研究』(山川出版社、一九九八) 三九四～三九五頁。
- (70) 風俗画報臨時増刊『新撰東京名所図会・四谷区乃部』(東陽堂、明治三十六年) ただし、五味文彦編『詳説日本史研究』(山川出版社、一九九八、三八一頁) による。
- (71) 五味文彦編、前掲書(註70) 三八一頁。
- (72) 国木田独歩『二十三階堂主人に与ふ』(『国木田独歩全集 第一巻』学習研究社、一九九六) 一三四頁。
- (73) 屋木瑞穂『樋口一葉』琴の音』に関する一考察―ヴィクトル・ユーゴー『哀史』との比較を通して』(『三重大学日本語学』一九九九年十月) によると、当時社会問題と化していた貧民問題に強い関心を示し、それらを作品化したのは遅塚麗水『餓鬼』(一八九一)と樋口一葉『琴の音』(一八九三) ぐらいしか見当たらない。両作品は、貧民救済が社会問題として認識されていく同時代状況の中で、社会のゆがみの現われとしての下層社会の暗黒面に照明をあてた作品である。
- (74) 岡部牧夫『海を渡った日本人』(山川出版社、二〇〇二) 一～五頁。
- (75) 岡部牧夫、前掲書(註74) 二〇～二十一頁。
- (76) 木村健二『在朝日本人の社会史』(未来社、一九九九) 四〇頁。
- (77) 桑原伸一『国木田独歩―山口時代の研究』(笠間書院刊、一九七二) 一四一頁。
- (78) 国木田独歩『帰去来』(『国木田独歩全集第二巻』(学習研究社、一九九六) 三二九頁。
- (79) 桑原伸一、前掲書(註77) 一六〇頁。
- (80) 国木田独歩『明治廿四年日記』(『国木田独歩全集第五巻』学習研究社、一九九六) 二〇八頁。
- (81) 国木田独歩、前掲書(註80) 二〇五頁。
- (82) 高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』(岩波新書、二〇〇二) 五十一～五十三頁。
- (83) 木村健二『在外居留民の社会活動』(『岩波講座 近代日本と植民地5―膨張する帝国の人流』(岩波書店、一九九三) 三十四頁。
- (84) 木村健二、前掲書(註76) 十四頁。
- (85) 国木田独歩、前掲書(註26) 一八一頁。
- (86) 国木田独歩『置土産』(『国木田独歩全集第二巻』学習研究

社、一九九六）二七八頁。

(87) 国木田独歩「少年の悲哀」〔『国木田独歩全集第二卷』学習研究社、一九九六）四七三頁。

(88) 一ノ瀬俊也『旅順と南京―日中五十年戦争の起源』文春新書、二〇〇七）四十五〜四十六頁。本書は、日清戦争に従軍した第一師団軍夫丸木力蔵の絵日記『明治二十七八年戦役日記』と第一師団歩兵第二連隊上等兵関根房二郎の日記『征清従軍日記』をもとに日清戦争の実態を浮き彫りにしたものである。とくに興味深いのは絵日記で、そこには前線の部隊に食料を輸送する仕事をしていた軍夫が見た戦争の裏面が彩色あざやかに描写されている。

(89) 原田敬一、前掲書（註8）七十七頁。

(90) 一ノ瀬俊也、前掲書（註88）一一八頁。

(91) 原田敬一、前掲載（註8）八十頁。大谷正「文明戦争」と軍夫」〔『日清戦争の社会史―「文明戦争」と民衆』（フォーラム・A、一九九四）二〇一頁。

(92) 一ノ瀬俊也、前掲書（註88）扉口絵10・11。

(93) 原田敬一、前掲書（註8）七十七〜八十頁。

(94) 国木田独歩、前掲書（註86）二八四頁。

(95) 大谷正、前掲書（註91）二〇〇頁。

(96) 芦谷信和「忘れえぬ人々」〔『独歩文学の基調』桜風社、一九八九）二九五〜二九六頁。

(97) 山田博光『国木田独歩論考』〔創世記、一九七八）二十一〜二十二頁。

(98) 国木田独歩「書簡―一八九七年一月三十一日、田山録弥（花袋）宛」〔『国木田独歩全集第五卷』学習研究社、一九九六）四一七頁。

(99) 山田博光、前掲書（註97）七九頁。

(100) 原田敬一、前掲書（註8）七十七頁。

(101) 岡部牧夫、前掲書（註74）十六頁。

(102) 国木田独歩、前掲書（註26）七十一頁。